



Profile — 繁榊算男

1968年、東京大学卒業。1974年、アイオワ大学でPh.D.取得。東北大学教育学部助教授、東京工業大学工学部教授、東京大学総合文化研究科教授などを歴任し、2009年より現職。大学入試センター客員教授を兼任。専門は計量心理学、ベイズ統計学。主な著書は『ベイズ統計入門』（単著、東京大学出版会）など。

皆さんはアメリカの田舎というと真っ先にどこをイメージしますか？ アメリカ人の多くにとっては、それは中西部であり、アイオワ州です。映画『マディソン郡の橋』で雑誌記者を好奇の目で見る地元の人たち、『フィールド・オブ・ドリームス』でトウモロコシ畑を開いて作った野球場、また、『ストレイト・ストーリー』で老人が仏頂面の冗貴に会いに行くためにトラクターで横断する道中を思い出してもらえば、アイオワ州が古き良きアメリカの代表的な土地であることがわかります。

私は、このアイオワ州にあるアイオワ大学に、1972年から2年間留学しました。アメリカ社会の懐の深さの一つの表れですが、都会や田舎に関係なく、全米の多くの大学にそれぞれが誇りにする特色があり、良い先生がいます。アイオワ大学は統計学で有名で、また、ETS (Educational Testing Service) と並ぶ ACT (American College Testing) という全米のテスト機関がアイオワシティにあり、私が留

出会いを活かす

帝京大学文学部 教授

繁榊算男 (しげます かずお)

学した当時は、指導教員のノヴィック (Novick) 先生やフェルト (Feldt) 先生がいました。

ノヴィック先生は、テスト理論の古典的名著である *Statistical Theories of Mental Test Scores* の著者の一人として、留学時には既に有名でした。私自身もテスト理論を勉強するつもりでその希望を伝えたのですが、「私はもうテスト理論はやっていないよ」という意外な返事でした。彼はもともと統計学者だったので、ベイズ統計学中心の研究体制をとっており、私もその勉強をすることになりました。

率直に言えば、最初の半年間、彼の授業にあまり心を動かされず、学問的なにおいを感じませんでした。しかし、グッド (Good)、リンドレー (Lindley) など、ACT に講演に来たベイズ統計学者たちの緻密な論理の筋道と情熱に共感し、また、科学哲学や科学方法論の本を勉強するうちに、ベイズ統計学の真骨頂がわかってきました。そのような目で彼の授業を振り返ってみると、アイデアもあり、かつ、実践的なものでした。難解な数学ができることがえらいように見えていた当時の若い私にとっては、非常に平易な語り口の授業であったことが、彼のアプローチの真価を見えにくくさせていたようです。ベイズ的階層モデルの一般化について行列計算のオンパレードの展開を仕上げて彼のところへ持っていくと、「僕はもう線形数学は忘れたよ!」というような感じのやや冷たい対応だったこと

を記憶しています。アイデアのない単なる数学的要約だったのでしよう。数理的計量的アプローチをとらない方には、統計学も数学も同じ穴のムジナのように見えるかもしれませんが、統計学の神髄は、方法論であり、情報をくみ取るためのアイデアであり、数学とは発想が全く異なっているといえます。

研究者の専門分野や研究への取り組み方のスタイルなどは、自分の選択の結果だけではなく、誰に出会うか、どのような環境におかれるかに左右され、そして、それは多分に偶然です。たとえば、ノーベル賞を取った白川秀樹先生はじゃんけんでは負けて、六人の学生枠がある研究室に一人だけ入れませんでした。しかし、じゃんけんで負けた研究室での勉強が後のノーベル賞につながりました。じゃんけんほどではなくても、偶然が影響する場合や、やむを得ずの選択をせざるを得ない場合もあるかと思えます。

私の場合は、ベイズ統計学は、科学における方法論として、また、日常的な意思決定の指針として、整合性を好む私の単純素朴な性向に合っていて、ノヴィック先生との出会いは結果的に幸運でした。若いこれからの研究者も、たまたま決まったことでも、好きになるように努力してみる価値はあります。偶然性を上手に生かすことが大事です。かなり頑張っても好きになれなければその時にまた考えればいいし、無駄になるような汗や努力はないように思います。